

地域日本語シンポジウム まちの日本語プラットフォーム2020

外国人・日本人が語る

「日本語でのコミュニケーション」

～ともに暮らし・ともに働く～

実施報告

2021年3月
公益財団法人横浜市国際交流協会

～まちの日本語プラットフォームとは～

外国出身の人たちの増加・定住化が進み、学校や職場、生活の場など、日常の暮らしで多文化を背景にした様々なコミュニケーションが行われています。YOKEでは、多様な人々が活躍できる地域づくりにむけ、日本人、外国人、活動分野の異なる人たちが行き交い、さらなる行動のきっかけを得られることを目指し、2017年にトークイベント「まちのほんごプラットフォーム」を実施しました。

それから3年。2020年8月に、横浜市域における地域日本語教育の総合的な体制づくりを進めるための拠点「よこはま日本語学習支援センター」が開設されたことを機に、今の横浜での多様なコミュニケーションのありようを、現場から学びます。

身近な声をもとに「横浜×日本語×多文化共生」の実現に向けた取り組みの現状を共有し、今後の展望や連携体制づくりのきっかけとし、横浜市域における地域日本語教育の総合的な体制づくりへの取組を伝えていくことを目的としています。

【概要】

■日時：2020年12月19日（土）10：00～12：30

■場所：オンライン(Zoom)

■参加者：第一部 76人
第二部 37人

■プログラム：

第一部 シンポジウム 10：00～12：00

-基調報告

「多文化共生社会に向けて、私たちがいま考えること」

岩田 一成さん

-事例発表「ともに暮らし・ともに働く場からの報告」

報告1 -学校や地域で- 趙 春梁さん

報告2 -親子で- 村上 直子さん ラナ タハさん

報告3 -職場で- 増尾 和行さん レ・ティ・ホさん

-登壇者によるディスカッション

第二部 交流タイム 12:00～12:30

小グループに分かれ、参加者同士の交流

■主催：公益財団法人横浜市国際交流協会

■その他：横浜市委託事業/文化庁令和2年度「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」活用

<実施報告目次>

【概要】	p1
【広報チラシ】	p2
【第一部】	
基調報告	p3
事例発表	
報告1	p4
報告2	p5
報告3	p6
ディスカッション	p7
【第二部】交流タイム	p9
【参加者の声】	p9

【広報チラシ】



地域日本語シンポジウム
まちの日本語プラットフォーム2020

外国人・日本人が語る
「日本語でのコミュニケーション」
～ともに暮らし・ともに働く～

外国出身者の増加・定住化が進み、日常の暮らしで、多文化を背景にしたやりとりが行われています。誰もが活躍できる地域づくりにむけ、日本人・外国人・活動分野の異なる人たちが行き交い、さらなる行動のきっかけを得られることを目指し、今の横浜での多様なコミュニケーションのありようを、現場から学びます。

日時 2020年12月19日(土)
10:00～12:00 第1部 シンポジウム
12:00～12:30 第2部 交流タイム

会場 オンライン (Zoom)
URLは申し込みの方に送ります

対象 横浜市内在住・在勤・在学・活動の方
80名 (先着順)

参加費 無料

基調報告・コーディネーター 「多文化共生社会に向けて、私たちがいま考えること」
岩田 一成さん (聖心女子大学日本語日本文学科教授)

事例発表 (発表順) 「ともに暮らし・ともに働く場からの報告」
趙 春梁さん (中国出身)
村上 直子さん (サロン・デ・チャルラス 青葉代表)
ラナ タハさん (シリア出身)
増尾 和行さん (社会福祉法人たちばな会・特別養護老人ホーム天王森の郷)
レ・ティ・ホさん (ベトナム出身)

申込み 裏面参照

TEL 045-222-1173
主催：公益財団法人横浜市国際交流協会 (YOKE) MAIL f-student@yoke.or.jp
(よこはま日本語学習支援センター) URL https://www.yokeweb.com/

横浜市委託事業/文化庁 令和2年度「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」活用

申し込み メールフォームにてお申込みください。
12月4日(金) 0:00受付開始
(QRコードあり)
<https://ws.formzu.net/dist/S91832237/>



プログラム **第1部 シンポジウム 10:00～12:00**
(予定) **基調報告「多文化共生社会に向けて、私たちがいま考えること」**
岩田 一成さん
事例発表「ともに暮らし・ともに働く場からの報告」
報告1「学校や地域で」 趙 春梁さん
報告2「親子で」 村上 直子さん ラナ タハさん
報告3「職場で」 増尾 和行さん レ・ティ・ホさん
登壇者によるディスカッション

第2部 交流タイム 12:00～12:30
小グループに分かれての、参加者同士の交流タイムです。

みなさんのプロフィール

岩田 一成 (いわた かずなり) さん
専門は日本語教育学。大学院生のときからボランティア日本語教室に関わる。「やさしい日本語」関連の研究に関わる一方、ライフワークとして変な公用文や公共サインをコレクションしている。著書に『読み手に伝わる公用文―「やさしい日本語」の視点から』『やさしい日本語で伝える! 公務員のための外国人対応』(共著) など。

村上 直子 (むらかみ なおこ) さん
世界中の母親と子どもたちがおしゃべりしながら友だちになる「サロン・デ・チャルラス青葉」代表。1984年、インドシナ難民の方達への生活支援とアフターケアとしての日本語支援を始める。以来、様々な世代の外国人・日本人とともに、日本語を学び語り合う場を作ってきた。今も地域日本語ボランティアの役割とは、を考えながら、地域の共生の実現をテーマに活動を続けている。

増尾 和行 (ますお かずゆき) さん
社会福祉法人たちばな会・特別養護老人ホーム天王森の郷サービス事業部介護課長。10年前に初めて在日外国籍介護スタッフを受け入れ、介護技術と日本語学習指導を担当。以来、これまでに4か国14名の在日外国籍スタッフ、2か国5名の留学生などへ日本での生活や、介護の仕事について指導をしている。

趙 春梁 (ちよう しゅんりょう) さん
中国遼寧省出身。2002年に来日。小学生2児の父。外国につながる子どもの多い小学校で、PTAに積極的に参加し、教子をふるまうイベントを開催したり、翻訳サポーターをしたりするなど交流に努める。また、地域の子ども会でも活躍中。現在みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ地域コーディネーター。

ラナ タハ さん
シリア出身。国では建築家をしていた。ご主人と3人の男の子と暮らす。8年前にサロン・デ・チャルラスと出会う。日本で自分の文化を伝えたいと、ノート表紙などの紙に幾何学を描くオリジナルの技法「円と線、イスラム幾何学模様」の作品作りに取り組んでいる。

レ・ティ・ホ さん
ベトナム出身。特別養護老人ホーム天王森の郷 介護スタッフ。2004年に来日。小学生一児の母。子どもの頃から憧れていた『人を助ける仕事』がたく、この夏に一念発起。長く勤めていたクリーニング店を退職し、介護士を志す。現在は働きながら資格取得を目指している。育児・仕事・勉強と目が回る毎日だが、大きな夢に向かって取り組んでいる。

よこはま日本語学習支援センター
Yokohama Nihongo Support Center

外国人が生活の場で円滑にコミュニケーションのできる環境を整えていく必要が高まる中、「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」を進めていくための拠点として「よこはま日本語学習支援センター」を2020年8月 横浜市国際交流協会(YOKE)に開設しました。

【第一部】

基調報告「多文化共生に向けて、私たちがいま考えること」

岩田一成さん(聖心女子大学日本語日本文学科教授)

日本語教育学を専門とする岩田一成さんに、やさしい日本語の現状や今後の展開をお話いただきました。日本語によるコミュニケーションの必要性とポイントについて、具体的なデータや図等をもとに分かりやすい説明がありました。

● まちの「サイン」を外国人の視点から見てみると

—「避難所」のマークは町の至る所にあります。漢字と一緒にあるので、マークをよく見ない日本人は多いと思いますが、外国人はこのマークを認識していない可能性があります。外国人の目線で見ると、避難場所のサインは余計な文言がたくさんついている。

「〇〇市が指定しています」とか、「地震の時の三原則、落ち着いて身の安全、…」と、文言を書くほど、文字が読めない人は気になります。シンプルに「ここに逃げておいで」というマークのほうが使えます。外国人と接するときは、言いたいことをストレートに伝えるのが大原則です。

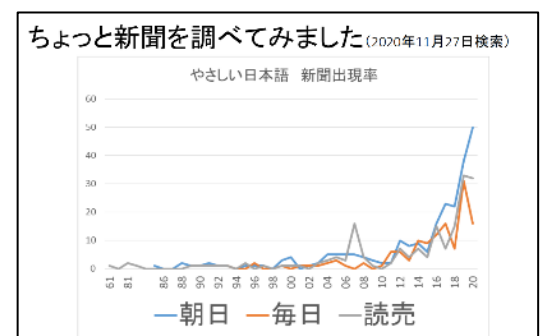


● 相手に合わせてわかりやすく。「やさしい日本語」の取組み

—相手に合わせてわかりやすく日本語を伝えようという運動で、日本語を母語としない方に向けて使うことが多いですが、高齢者や障害者に対しても同じと考えてください。新聞で「やさしい日本語」と検索をかけると、新聞に出る頻度が、最近急激に増えています。いろいろな自治体が「やさしい日本語」の普及に取り組んでいるところです。問題は日本語がストレートでないことで、それをわかりやすい日本語に変えることが運動の根幹です。

SDGsでは、誰も取り残されないように情報を伝えることを目標にしています。取組の17番は知識や技術へのアクセス、3番は健康と福祉の推進。やさしい日本語は、この17番、3番に位置づけられる概念です。17種類のカラフルなイラストに短い解説を加えた見せ方は、plain language(やさしい言語)の発想です。わかりやすく伝える工夫を行っています。

国も動き出し、出入国在留管理庁が「生活・仕事ガイドブック」(注1)という、外国人向けにやさしい日本語のお知らせを出しました。それに関わる形で関係閣僚会議の総合的対応策、外国人材の受け入れに関する政策ですが、この中でやさしい日本語が明記されています。さらに出入国管理庁と文化庁が共同でガイドライン(注2)を出しました。わかりやすい日本語を作るためのマニュアルが、既に国から出ています。外国人には、15言語プラスやさしい日本語での発信が基準になっています。



(注1)「生活・仕事ガイドブック やさしい日本語版～日本で生活する外国人のみなさんへ～」法務省
http://www.moj.go.jp/isa/support/portal/plain_japanese.html (閲覧日：2021年3月31日)

(注2)「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」出入国在留管理庁・文化庁
http://www.moj.go.jp/isa/support/portal/plainjapanese_guideline.html (閲覧日：2021年3月31日)

● 日本語コミュニケーションの必要性とあり方

一日本語ができる外国人は、東京都(法務省の委託調査)の調査によると80%で、広島市の調査では66%。日本語で話しかければ、6~8割の人は理解できるようになります。相手が日本語で話してきたら日本語で返すのがいいです。

文字を書くときは、平仮名がいいです。看板に戻って、2つを比べてみると、どちらが外国人にやさしいでしょうか？右側のほうが圧倒的にやさしいサインです。平仮名をふって多言語化する、英語よりも日本語を使いポイントを話すことが日本語のコミュニケーションでは大切です。



事例発表「ともに暮らし・ともに働く場からの報告」

基調報告に続き、横浜で暮らす外国人、外国の人と接する日本人の皆さんによる事例発表がありました。「学校や地域で」「親子で」「職場で」のそれぞれの立場から、コミュニケーションの工夫等について、現場での日本語コミュニケーションの事例を織り交ぜながらお話いただきました。また、参加者からは発表の途中でコメント欄に質問を入れてもらい、パネルディスカッションの話題としました。応援コメントも多数集まりました。

(報告1)一学校や地域で一 趙 春梁さん(中国出身)

小学生の父として、学校や地域の交流活動を主催、翻訳のサポートなどに関わる経験から話していただきました。



◇ 小学校でのPTA活動

一企業に勤めていた頃は休みがなく、学校のことに関われませんでした。ある時、学校の懇談会に参加した後、先生から「外国につながる子の保護者に、学校の方針などを理解してもらうこと、学校活動に参加してもらえるように協力してほしい」と言われました。自分ができることで貢献をしたいと思い、是非やりたいと返事をしました。会長から「趙さんがいてくれると私もやる気がでる」と励ましの言葉をもらいました。活動は、運動会等の行事の受付、外国人保護者への説明、旗当番があります。旗当番は日本で初めて知りましたが、当番のやり方等をエリアの人にレクチャーしています。

一番大きな企画は餃子パーティーです。まずは学校に足を運んでもらうため、保護者を数名集めて企画し、学校との連絡もしました。結果としては、保護者のネットワーク作りのきっかけになり、近くの遊び場所など生活に役立つ情報をたくさん得られました。アンケートでは、友達がいたり、通訳や日本語が分かる人がいたりすると行きやすくなることが分かりました。言葉を越えたコミュニケーション、食を通じて交流ができました。その場でゴミの分別もして、プラ、生ゴミ、燃やすゴミなど、来た人は勉強になったと思います。



◇ 地域の行事

一町内会の活動にも参加しています。町内会が行う地域の行事は、新入生歓迎会、花見の時に大通り公園でバーベキュー、日帰りのバス旅行、温泉旅行、お祭りの神輿もあります。地域で11の町がありますが、お祭りでは各町で競い合います。徒競争、綱引き、縄跳びなどがあります。クリスマス会は、子どもにお菓子を配り、大人は忘年会を兼ねて町内会館に集まり、食事とお酒を出して、町内の人と話をします。

◇ 日常のコミュニケーションの工夫

一町内会の忘年会では最初、話す相手がいませんでした。今年3年目ですが、続けて参加することでやっと去年、会長から「あんた何て名前なの？」と言われ、名前と呼んでくれてすごく嬉しかったです。

一自分がしたコミュニケーションの工夫は挨拶です。近所の人で、普段は誰とも話をしないが、私とエレベーターで会うと挨拶して、少なくとも笑ってくれる人がいます。その人に挨拶をされて妻に驚かれたことがあります。毎回笑顔で何十回もこちらから挨拶したからです。私が言いたいことは「言葉が分からなくても積極的に挨拶をしましょう」ということです。

(報告2)―親子で―

ラナ タハさん(シリア出身)×村上 直子さん(サロン・デ・チャルラス 青葉代表)

世界中の子どもたちがおしゃべりしながら友達になる「サロン・デ・チャルラス青葉」の代表を務める村上さんと、サロン・デ・チャルラスの参加者で、ご主人と3人の男の子と暮らしているラナさんのお話です。



◇ (ラナさん)サロン・デ・チャルラスとの出会い

一來日当初は日本語があまり話せず、生活が母国と全然違いました。8年前に村上さんに出会い、サロンに招待してくれて、日本人の友達や外国人と話す機会が増えました。そこでは、救急車の呼び方、災害時のトレーニング、保育園、幼稚園の申請方法などを教えてくれました。

◇ (ラナさん)日本語を使わないコミュニケーションの場

一言以外で日本人と交流する方法を考え、シリアの文化を生かした「円と線」というプロジェクトを始めました。「円と線」は、幾何学芸術は全て円と線で描くことができるというところから、「お互いに知り合いなさい」ということを表現しています。「紙に糸で幾何学模様を描く」ことは、紙を大切にする日本文化に対して理解と共感を込めたものです。

展示会・ワークショップでは、Facebookに宣伝を入れたときに15,000人も「いいね!」をもらい、興味のある人がたくさんいることを知りました。母国の文化を紹介しながら日本人と交流したくて、趣味として日本語ができなくてもコミュニケーションできる場を作りました。



◇ (村上さん)地域の活動を通してのコミュニケーションのあり方

一今は外国人への公的支援も整備されつつあり、日本語クラスも多言語情報も多くなりましたが、その恩恵にあずかれない人もいます。1997年の地域日本語学習者ニーズ調査の際には生活に必要な情報が届いていないことが分かったことから、2002年に、やさしい日本語で情報を提供する「生活情報ネット あつみ」を

有志で立ち上げました。

加えて、地域でのコミュニケーションが重要です。日常的に外国人と接していない一般の方にはハードルが高いようで、英語はダメだとか、話すのが不安だという人がいます。地域の日本語ボランティアは、その溝を埋める役だと思って活動しています。

最近、団地の自治会から、「外国人と接点がなくコミュニケーションがないので間をつないでほしい」という相談がありました。それを受けて、団地の管理会社である住宅公団、UR と話し合いを行い、団地内に日本語クラスを開けることになりました。団地内、近隣の参加者も募り、自由に、楽しく、異文化交流ができ、日本語でのコミュニケーションができるクラスを作りたいと考えています。

日本は、外国人受け入れ国としては、世界で4番目とされています。在住外国人の方達は、もう「お隣さん」です。もっとフランクに肩の力を抜いて、隣同士で良いコミュニケーションできる地域の環境を作りたいと思います。

(報告3)ー職場でー

レ・ティ・ホさん(ベトナム出身)×増尾 和行さん(社会福祉法人
たちばな会 特別養護老人ホーム天王森の郷)

高齢者施設で外国出身のスタッフを受け入れ、介護技術と日本語学習指導を担当している増尾さんと、その職場で働くホさんから報告がありました。



◇ (ホさん)日本語を学びながら介護職の仕事をすること

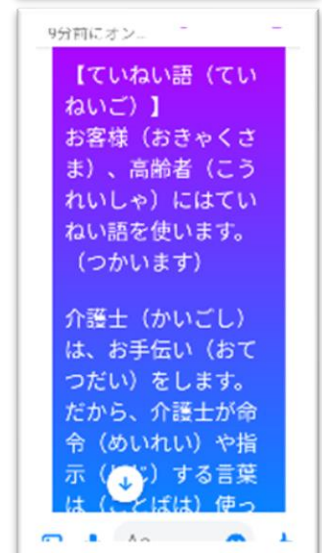
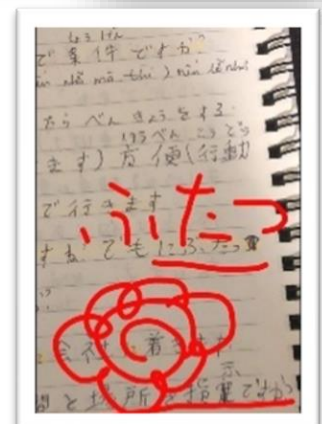
一昨日前に(日本語について)何も準備していなかったため、カタカナが全く分からず仕事で困りました。子どもが小学生になったとき、友人に教えてもらった日本語教室で勉強を始めました。2年くらいで少し話ができるようになり、学校の先生と面談の時に受け答えができました。ただ、いまだに市役所に行って初めての書類を漢字で書く場合は、30分くらい時間がかかります。

現在、介護の仕事をしています。以前、クリーニングの仕事をしていたので、アイロンがけ等の仕事には自信があり、私がまとめてやります。それに対して苦手なのは、会話と漢字の記録を読み書きすることです。出勤前に記録を読んで、わからない言葉は先輩方に「これ読めないからお願いできますか?」と聞きます。そうすると、「今日病院に行くので別にご飯を食べるとのことだ」というように教えてくれます。

仕事を始めて3か月も経たないですが、お茶を出すことと移動介助などの補助はできます。さらに、オムツ交換、ベッドへの寝かせ方、ご飯の手伝い等、できることを増やせるように、これからリーダーに相談していきたいと思っています。

◇ (増尾さん)介護現場の受け入れ側の工夫

一介護施設では、ベトナム、中国、フィリピンの方と働く機会が増えました。介護人材の不足に対して、国が技能実習制度を用いて海外からの労働力を導入して問題解決に取り組んでいます。私たちは10年前にベトナムからの受け入れを始め、現在も12名と一緒に仕事をしています。来日前に日本語を勉強してくる



人、来日してから勉強する人がいますが、お金がかかるのでしっかり勉強ができない人もいます。企業としては、勤務時間に日本語を勉強させるのは難しいのですが、当事業所としては外国籍のスタッフを大事にしないと介護の仕事はままならないと思っています。私は 24 時間、仕事以外の時間で日本語学習の相談にのるようにしています。

ホさんとは、日本語について SNS を通してやりとりしています。以前、「丁寧語はどう使い分けたいか」という相談がありました。このようなやりとりのときは、漢字の後に括弧で送り仮名を振っています。また、ホさんがノートに日本語での返答を書いたものを、写真で送ってくれます。それに、赤で○や直しを入れていきます。

日本人スタッフも、外国人スタッフとのコミュニケーションにやさしい日本語を活用し、理解しあえるようになる必要があります。伝わる日本語を使用した指導、介護技術を教えられる環境整備を進めるべきです。当事業所としても、今日の話の参考に取り入れて、受け入れを進め、日本で働く、横浜で暮らすことが生きがいになれるような環境を目指していきます。

登壇者によるディスカッション 「多様な人々が活躍できる地域づくりに向けて」

事例発表を受け、「多様な人々が活躍できる地域づくりに向けて」をテーマに、岩田さんをファシリテーターとして、登壇者同士でやりとりをしました。まず、参加者からの質問を紹介しながら、それを軸にディスカッションを展開していきました。

Q1:情報を伝える時に、外国人、特に中国の人に伝えるにはどうしたら分かりやすいですか？

外国人が情報を集めるのは外国人が集まる場所（中国の物産店等）なので、そういったところで中国語で発信すると、伝わりやすいと思います。



趙さん

日本語の情報は、どのくらい中国人に届きますか？



岩田さん

私は日本語の情報を得ることが少なかったです。日本人との交流があれば、その中で話を聞きながら理解できると思います。また、テレビを通じて日本語で情報を得ることはあります。



趙さん

Q2:「郷に入りては郷に従え」というように、日本人のやり方を強要されると嫌な人もいるのでは？

日本が好きで来ているということもありますが、私は最初に善し悪しの判断はしません。まず、理解する。理解した後で取捨選択する。100%受け入れる訳ではないが、いいところも多いと思います。



趙さん

Q3:ラナさんのワークショップに来る人はどういう人ですか？

手作りのアクセサリに興味がある人や大学の先生、イスラムに興味がある人も多かったです。どうして幾何学芸術だけか、人間とか動物とか飾らないのかと聞かれたこともありました。



ラナさん

村上さん、サロン・デ・チャルラスでの活動について、補足はありますか？



岩田さん

チャルラスでは、料理を通しての国際交流、ラナさんの展示会、こどもの国、花見などに行きます。イヤーエンドパーティー、救急救命講座、地域の方と一緒に防災講座もしています。大きな災害時は外国人の力を借りないといけないし、大きな担い手になると信じています。



村上さん

Q4:介護職の現場で働いていて、楽しいことは何ですか？

入居者の方は甘えんぼうだと感じることがあります。「おなか大きいね、いつ生まれる？」などと冗談を言って楽しいです。おばあちゃんになっても、心は子どもみたいに甘えん坊です。



ホさん



岩田さん

日本の介護士はすぐに辞めると言われていて、仕事は大変そうですが、介護の仕事の魅力はなんですか？

私は辞めません。クリーニングの仕事では日本語の勉強になりませんでした。介護は大変だけど、日本語を話すことができるし、新しい言葉を全部先生が教えてくれました。それに、自分の親の老後を見る時の準備になると思っています。やり方を先生が教えてくれます。



ホさん

Q5:外国人が仕事をしやすくなるように、どのようなことに配慮していますか？

よく使うことばを伝えています。アプリ等は使っていませんが、英単語帳のように、表に介護用語を書いて裏にその読み方・意味を学べるものを配布しています。



増尾さん

Q6:介護現場に外国人材が増える中で、それぞれの事業所、施設共通で使えるものはありますか？

共通で県でも市でもいいのですが、外国人の働く人が分からない言葉をネットに入れて、誰かが答えてくれるようなコミュニティができると良いと思います。このような取り組みがあれば、通勤途中や育児の合間などに勉強できると思います。日本に暮らす外国人は勉強熱心なので、隙間時間に日本語が勉強できるツールがあれば率先して取り組めると、ここ10年で感じています。



増尾さん



岩田さん

LINEに質問を挙げたときに答える人は、増尾さん以外にいますか？

残念ながら私だけです。こちらから、勤務時間以外に対応してと日本人スタッフに言うのは、パワハラになってしまいます（笑）。



増尾さん

Q7:外国の人が、情報を得るために苦労することは何ですか？

情報が自動的に入ってこないから、自ら情報収集に行かないといけない。情報をどこから得るかが分からない。という2つがあります。



増尾さん



岩田さん

ラナさんはお子さんがいると思いますが、情報を得るのに難しい点はありますか？また、どこから情報を得ますか？

学校から情報をもらいます。最初、学校の書類は読むのが難しかったです。学校に、「漢字の上に小さな平仮名で書いてください」とお願いしました。今は5~6年生くらいの漢字を読めるようになりました。三男のお母さんたちのLINEグループがあり、いつも情報をもらって、分からないことを聞きます。普段大切なことは村上さんに聞きます。8年前に知り合いましたが、お母さんのように、相談したら私の問題を解決してくれます。



ラナさん

【第二部】

交流タイム

参加者の皆さんが知り合い、感想を共有する時間として、交流タイムを設けました。
第1部シンポジウムを受け、問いを「私たちがともに働き・ともに暮らすための、よりよいコミュニケーションと何でしょうか」とし、小グループに分かれて、話し合いました。自己紹介、シンポジウムの感想、問いに対する意見など、各グループにパネリストが入り、交流の時間をすごしました。

【参加者の声】

終了後のアンケートから

このシンポジウムには、国際交流・多文化共生関係や日本語教育関係の方だけではなく、福祉・教育・行政・子育て関係の方、また、学生など幅広い方にご参加いただきました。アンケートでは登壇者の皆さんへの応援メッセージも多数ありました。いただいた声の一部を紹介します。(いずれも一部抜粋)

(Q)第1部シンポジウムについて、感じたことや印象に残ったこと

- やさしい日本語の取り組み状況の理解が深まった。
- 街中の案内表示の複雑さ、移住定着率の低さに驚きました。やさしい日本語の必要性を改めて感じました。
- 基調報告、事例発表とも現場の生の声が聞けて、大変参考になりました。
- 現場の方の経験談、そこからの専門的視点からのアプローチがあり大変参考になりました。
- 日本人と外国人の交流は言葉だけではなく、心で寄り添うことも大事と感じた。
- 言語のバリアや生活のさまざまな困りごとを抱えている外国人のための情報共有のネットワークや、地域のつながりが重要であることを改めて感じました。
- 特に外国から来られた方のお話を聞く機会があまりないので、とても参考になりました。
- 趙さんが日本人と心の交流に努力して頑張っている日常に感心しました。レさんが介護支援専門員として頑張っていることにも、感動しました。三人のキーワードは「人とのつながり」と感じました。
- 外国人住民の方々がそれぞれ感じられていること、日本で暮らし想うことについて直接お話を伺うことができ、日本語学習者という視点ではなく社会で活躍する人材としての視点の大切さを改めて感じました。

(Q)第2部交流タイムの感想

- 交流会というインタラクティブな側面があり、意見交換ができて有意義でした。
- いろいろな角度からのご感想を聞くことができて、良かったです。
- 地域での取り組み事例がわかり、参考になりました。
- 同じような経験をしている方とお話できてよかったです。

(Q)外国人・日本人が「ともに暮らし・ともに働く」ために大切なことについて、感じていること

- 外国人を支援するのではなく、お互いを認め、お互いに刺激し合い、教え合い、外国人が自ら活躍できるチャンスを作ることが大切だと思います。
- 日本の習慣やマナーに加えて、日本社会に根差す独特なコミュニケーションの呼吸を知ってもらうこと、また共存する日本人は寛容をもって迎える土壌づくりが必要だと思っています。
- 外国人から日本語で質問された場合は必ず日本語で返すことが重要であると再認識しました。
- 相手の立場に立ち、尊重する気持ちでコミュニケーションを図ること。そのためにはまず何より、挨拶が大事と感じました。
- 違うことに寛容になり、知らないことを知る、ということも多くの方が楽しめるようになると、お互いのよりよい理解につながるのでは。
- 決まり事や慣例を伝える時は、なぜそうなのか、理由も伝えることは納得が伴うと感じます。また、そのやり取りを意識することで、相手国ではどうなのかという話が広がり、文化理解につながることを期待します。
- 外国人—日本人を、支援される側—する側として分けるのではなく、外国人側を担い手として捉えて役割を果たしてもらうことが必要（日本人側はそうした場を作っていくこと）
- つながりを作ってくれる人に頼るのではなくとも、地域とつながりを持てるような社会の仕組みづくりを考えていかなければならないと思いました。